

氏名(国籍)	梁 桂 熟 (中 国)		
学位の種類	博 士 (図書館情報学)		
学位記番号	博 甲 第 5149 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	図書館情報メディア研究科		
学位論文題目	中国における分類件名一体化に関する研究		
主 査	筑波大学教授	修士 (文学)	緑 川 信 之
副 査	筑波大学教授	経済学修士	永 田 治 樹
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	松 本 浩 一
副 査	筑波大学教授	博士 (図書館情報学)	谷 口 祥 一
副 査	近畿大学短期大学部教授	博士 (図書館情報学)	田 窪 直 規

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は 5 章から成る。

第 1 章「序論」では、研究の背景、目的、方法について説明を行った。

情報組織化の代表的なツールとして分類表と件名標目表がある。分類表と件名標目表のもともとの目的は異なっているが、どちらも文献の主題を表現するためのツールであるという点では共通している。そこで、分類表の体系と件名標目表の体系を統合することによって、両者の欠点を補い利点を活かそうという試みが出てきた。このような分類表と件名標目表を統合したものを分類件名一体化ツールと呼ぶことにする。

本研究では、中国における分類件名一体化の研究とそのツールの開発がどのように進展したのか、またその背景は何か、について考察を行った。研究方法として文献調査を用い中国における分類件名一体化の研究とそのツールの開発について論じている文献を分析した。

第 2 章「分類件名一体化の諸形態」では、これまでに存在した分類件名一体化の形態について考察した。

分類件名一体化の主な形態として、(1) 件名標目表における分類記号の参照、(2) 分類表と件名標目表の相互補完的一体化、(3) ファセット理論を適用した分類表と件名標目表の相互補完的一体化、(4) 分類記号と件名標目の自動的 (統計的) 対応付け、をあげることができる。分類表と件名標目表の両方を対等に扱い、それぞれ互いに他方の補完的役目を果たすように統合したものが、(2) の「相互補完的一体化」である。分類表と件名標目表を相互補完的に統合する場合、a) 分類表も件名標目表も新たに作成する、b) 既存の分類表を使用し、それに合わせて件名標目表を作成する、c) 既存の件名標目表を使用し、それに合わせて分類表を作成する、d) 分類表も件名標目表も既存のものを使用する、という 4 つの方法が考えられる。

中国の代表的な分類件名一体化ツールである『中国分類主題詞表』(以下、『詞表』と表記)は、(2) の「分類表と件名標目表を相互補完的に統合」したものであり、統合の方法は d) の「分類表も件名標目表も既存のものを使用する」である。本章では『詞表』の構造と使用方法について説明を行った。また、その他の形態についても検討した。

第 3 章「中国における分類件名一体化の進展」では、『詞表』の編成に至るまでの中国における分類件名

一体化の研究とそのツールの開発がどのように進展したのかを検討した。

中国において分類件名一体化の研究が始まるのは1960年代からである。この時代の代表的な研究者である劉国鈞は、分類法は件名法よりも体系性に優れ、件名法は概念をことばで直接表現する点で分類法よりも利点があると指摘し、両者の利点を活かした一体化の必要性を主張している。1970年代を経て、1980年代には分類件名一体化の研究が本格化する。世界で最初の分類件名一体化ツールと呼ばれる *Thesaurofacet* もこの時期に紹介されている。また、分類法と件名法の相違点として、侯漢清は「組み合わせの方法（事前結合方式と事後結合方式）」の相違をあげている。

こうした理論的研究とは別に、分類件名一体化ツールの編成につながる実際上の進展もあった。特に、後に『詞表』の二つの構成要素となる『中国図書館図書分類法』（第四版で『中国図書館分類法』に名称変更；以下、『中図法』と表記）と『漢語主題詞表』（以下、『漢表』と表記）の改訂に関わる問題がある。また、『詞表』が編成される以前にも、『中図法』あるいは『漢表』を利用して分類件名一体化ツールを編成しようという試みがあった。さらに、邓順国は『中図法』の分類項目と『漢表』の件名標目との対応関係を調べ、両者の項目がどれだけ一致するかを確認した。こうした理論的、実験的検討を経て、最終的に『中図法』と『漢表』を統合して『詞表』が編成されることになり、1994年に出版された。

第4章「考察」では、第3章で見てきた中国における分類件名一体化の研究とそのツールの開発の進展の背景について、理論的背景と実際的背景に分けて考察を行った。

理論的背景については、西洋分類理論の中国における受容過程が密接に関わっている。一方、分類件名一体化を進めなければならないと判断させた実際的背景として、図書館の中での分類作業と件名作業の枠を越えて、書誌データベース等の情報検索も考慮に入れた主題分析作業の必要性が出てきたことが考えられる。さらに、欧米や日本でも同じ状況が出現したが、中国だけが分類件名一体化ツールの開発を国のレベルで推し進めた理由として、情報検索の急速な普及によってそれを支える索引作成者の養成が間に合っていなかったことが考えられる。その他、分類件名一体化の最大の成果である『詞表』が『中図法』と『漢表』を基にして編成された理由について考察した。

第5章「結論」では、研究成果を整理した上で、結論と今後の課題について述べた。

中国における分類件名一体化の進展については全体的な流れを把握することができた。また、その背景については、理論的側面と実際的側面から考察を行い、一応の回答を見いだすことができた。個別の状況についてはさらに多くの史料を用いて検証していく必要がある。

## 審査の結果の要旨

本論文は、中国において分類件名一体化の研究とそのツールの開発がどのように進展したのか、またその背景は何かを、文献調査によって考察したものである。

第1章「序論」では、研究の背景、目的、方法について説明を行っている。目的と方法は上に述べたとおりであるが、その他に「件名標目表」と「シソーラス」を区別しない理由が説明されている。その理由の一つは、日本語と中国語がどちらも漢字を用いており、しかも必ずしも語義が一对一に対応していないという問題に由来する。たとえば、「件名標目表」（日本語）だけの意味をもつ「主題標目表」（中国語）と「シソーラス」（日本語）だけの意味をもつ「叙詞表」（中国語）という語があり、両者を区別するときにはこれらを用いている。一方、「件名標目表」と「シソーラス」を区別せずに表現するときに使われる語として「主題詞表」（中国語）がある。本論文の重要な研究対象である『中国分類主題詞表』の「主題詞表」の部分に「件名標目表」と「シソーラス」の両方の意味をもっているため、正確にはこのツールを「件名標目表/シソーラス」とでも表記すべきところだが、煩わしいので「件名標目表」で統一したと説明している。このほか、「主題」

(中国語)は「主題」(日本語)と「件名」(日本語)の両方の意味をもつが、文脈に合わせて訳し分けている。ほかの語についても同様で、慎重に対応していることが分かる。

第2章「分類件名一体化の諸形態」では、これまでに存在した分類件名一体化の形態について整理をし、『中国分類主題詞表』(以下、『詞表』)の位置づけを行っている。分類件名一体化の主な形態として、(1) 件名標目表における分類記号の参照、(2) 分類表と件名標目表の相互補完的の一体化、(3) ファセット理論を適用した分類表と件名標目表の相互補完的の一体化、(4) 分類記号と件名標目の自動的(統計的)対応付け、をあげている。本来の分類件名一体化は(2)と(3)であるが、(1)と(4)にまで広げることによって、本来の分類件名一体化の特徴をより明確にしたといえる。実際に存在する分類件名一体化ツールだけを基にするのではなく、より理論的に分類件名一体化について検討することが望まれるが、この形態モデルを用いることで、『詞表』を(2)に位置づけて他の形態との違いを明確にすることには成功している。

第3章「中国における分類件名一体化の進展」では、『詞表』の編成に至るまでの中国における分類件名一体化の研究とそのツールの開発の進展について、理論面と実際面に分けて検討を行っている。

理論面では、中国において分類件名一体化の動きが始まるのは1960年代からとしている。そして、60年代、70年代、80年代における分類法と件名法の相違点に関する研究を取り上げている。60年代の劉国鈞は、分類法は件名法よりも体系性に優れ、件名法は概念をことばで直接表現する点で分類法よりも利点があると指摘し両者の利点を活かした一体化の必要性を主張している。70年代の丘峰は、先の劉国鈞と同様に分類法の最も重要な特徴は系統性(体系性)であるとしたが、件名法の特徴としては劉国鈞と同じ直接性を特徴の一つとしてあげながらも最も重要な特徴は專指性(特定性)であるとしている。80年代の侯漢清は「組み合わせの方法(事前結合方式と事後結合方式)」の相違をあげている。これらの分類法と件名法の相違点に関する研究は、中国における西洋分類理論の受容の進展と密接な関連があると分析している。理論についての説明や細かい点での史料の使い方に多少の不備が見られるが、議論は概ね妥当といえる。

一方、実際面では、後に『詞表』の二つの構成要素となる『中国図書館図書分類法』(以下、『中図法』)と『漢語主題詞表』(以下、『漢表』)の改訂に関わる問題を取り上げている。『中図法』については、1985年と1990年の2回の会議で改訂の際にファセット化をすることが検討された(実際には実行されていない)こと、『漢表』については、1980年代後半の文献データベースの構築ブームにより多数の専門件名標目表が出版され、これらの専門件名標目表間の標準化が『漢表』を中心に検討されたことが、後に『詞表』の編成に影響を与えたと考察している。また、『詞表』が編成される以前にも、『中図法』あるいは『漢表』を利用して分類件名一体化ツールを編成しようという試みがあったことや、『中図法』の分類項目と『漢表』の件名標目との対応関係を調べ両者の項目がどれだけ一致するかを確認した調査が行われたことなどの歴史的事実を明らかにしている。

第4章「考察」では、中国において分類件名一体化の研究とそのツールの開発が進展した背景について、理論的背景と実際的背景に分けて考察を行っている。理論的背景については、第3章で見たように西洋分類理論の中国における受容過程が密接に関わっていることを指摘している。第3章と比べて議論の重複はあまりないが結論は同じであるので、第3章では「分類件名一体化の研究の進展」に限定し、その背景については第4章で述べる、という切り分けをした方がより明確な議論の展開になったと考えられる。

実際的背景については、いくつかあげられる中で、中国における情報検索の普及が強関わりしていると考察している。特に、情報検索が普及する一方で索引作成者の知識の不足が分類件名一体化の必要性をもたらしたと考える。知識不足の索引作成者を支援するために、①分類体系に慣れていない索引作成者がことばから分類項目を探せるように件名標目表を分類表の索引として一体化する、あるいは、②分類表には慣れている図書館関係者が情報検索のための索引作業も行うようになったため、件名標目表に分類表を一体化して分類項目からも件名標目を探せるようにする、という二つの方向が考えられる。このどちらか、あるいは両方

であるのかは明らかにできないとしたうえで、分類件名一体化を推進した理由の一つとして考えられると論じている。この議論を論証するにはさらに多くの史料とデータを必要とするが、可能性として十分あり得ることであり、今後検証すべき重要な見解を提示している。

第5章「結論」では、研究成果を整理した上で、結論と今後の課題について述べている。全体として、中国における分類件名一体化の研究とそのツールの開発の進展に関して明らかにしている。その背景については、まだ個々の点についてより詳細な分析が必要であるが、一定の成果を得ていると考えられる。

よって、著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。